

盲導犬を連れて 視覚障害者の旅

八ヶ岳南麓標高千以上の冬支度を始めた。カラマツが黄色い葉を散らし始めている。こちらに拠点を移し十八年になる。私は二十代の頃からめざす仕事は「トラベルデザイナー」に定め、旅行会社が実際に家を建てる人であるとすれば、トラベルデザイナーは一級建築士でありたいと、旅の分野で実績を積んできた。最近、その商標登録を認められた。

海外渡航経験は百回あまりだが、地球「女ひとり旅」から始まり、七歳の娘にリュックを背負わせ、ヨーロッパへ五十日間の旅。その後、一九九五年二月の「盲導犬も連れて行く視覚障害者」にやさしいフランスツアー」を皮切りに、様々な障害のある人が参加しやすいツアー企画に取り組んできた。そもそも取材を通じて

盲導犬の航空運賃が無料であることを知り、盲導犬で航空機をいっばいにしたらどんなにおもしろいことかと、軽い気持ちでこの分野に首をつっこんだ。が、知

りの舟やベネチアのゴンドラには、視覚障害者の方と共に盲導犬も乗りこんだ。持ち込み、投げれば開く籠型テントをかぶせて、トイレを設営し、草原のトイレを体感してもらった。

た。視覚に障害がある方々はピラミッド登り、段目まですり足られると、一歩また一歩と、単独で登り始め、みるみるうちに上へ。頂上で会流したが、一降りるのが怖い。一降りののは健康者のほうだった。すべてのツアーも企画

楽しい旅のデザイナー

冒険や新趣向で参加者を魅了



おそぞ まやい

「面白いことばかりに驚かさない」夢中になった。今までに企画・実施したツアーは四十七回。四十七回だが、冒険やチャレンジ色が強かったと思う。「不可能を可能にする」を合言葉に健常者が羨むような行先をあえて選んできた。靴にすべり止めのゴムペルトを巻いて、冬の北海道へ流水を触りに行ったり、厳寒の北極圏にオーロラを見に行ったり。京都の保津川下

す旅行会社担当者を説得し、前向きな作戦を練った。身体に障害のある方や高齢の方一人ひとりに、プラーシ人のボディガードをつけて、前列の席の安全を確保し、パレードを堪能してもらった。このツアーには、歩行が不安定なため、ショッピングカートを押して参加した七十代の女性が出たが、アマゾン川でも、ジャングルトレッキングやヒラニア釣りにもチャレンジし、楽しんだ。

「危ないからおやめください」は禁句。車いすをこぐ人の旅ではいかに排油をこなすか、が一番の悩みである。車いすトイレがあるはずもないモ

ンゴルのゴビ草原とアフリカ、ケニアの赤道上では、

た。元氣な熟年層が日頃遊んでいることと、ぜひ体験してみたい魅力的な旅の要素をドッキングさせ、参加するの何かアラスカアルファが期待できる旅。健康を維持し、病氣や障害を予防できると言うツアーである。そんな経緯から、この十月「旅してやせる 熊野古道フィットネス・ウォーキング」が生まれた。熊野古道は今年七月、世界遺産に登録され、いにしへの善い旅の道が続いて、昔の旅人はわらわを驚かす。一日に三十キロも歩いたぞ。

熊野灘の海辺に面した日本旅館を一軒遊び、海の幸中心の和食を三食で二百円が惜に押さえることにチャレンジしてもらった。公募した栄養士さんには、参加者が摂取する食事のカロリー指導をお願いした。古道歩きのおいしには、エステ体験やコンサート鑑賞、和太鼓練習、障害旅行術の講座などをちりばめた。

参加者は十七人の熟年男女。熊野灘の断崖絶壁の上に切れ切れに続く八つの時道道を声をかけ合いながら、毎日、精力的に歩いた。その結果、私も含めて、参加者の多くが二、三程度体重を落としたのだ。

「旅してやせる...」は、次なるテーマになりうるかもしれない。

文化